

---

# 太安万侶《おおのやすまろ》古事記を作った人の秘密 酔いどれ詩人、別荘病院の調査

春野一人

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

おのやすまろ  
太安万侶古事記を作った人の秘密 酔いどれ詩人、別荘病院の調査

### 【Nコード】

N5099Y

### 【作者名】

春野一人

### 【あらすじ】

古事記と日本書紀といった二つの歴史書が、同時に作成された。両書ともかなり似通った内容であるが、大きな違いもある。日本書紀に関しては、その後の官制歴史書である「続日本紀」に作成された記事が載せられているが、「古事記」については記載皆無である。「古事記」は巻頭に、太安万侶が、编者として、長々と文章を書いているので、それを本として、「

古事記」の作成が、日本書紀に十年ほど先立つことが知れるのみである。著名な酔いどれ詩人・田沼遠は入院ごとの歴史研究を出版し、

ちょっと人気を得ている。さて、今回のテーマは何か？

## 酔いどれ詩人、田沼遼へたぬまりようの入院

酔いどれ詩人、田沼 遼は、数年に一度体調を崩し、別荘行きと称して憩意な院長のいる、鎌倉海浜クリニックに入院するのが常なのだ。遼は詩のみでなく、洒脱な味わいのエッセイも書き、人気がある。読書好きの彼にしても病室では、いささか退屈である。このころは、退屈ををまぎらわすのに彼は歴史の謎に取り組むことになっている。前回は邪馬台国のあった場所、前々回は織田信長の本能寺の変をテーマに取り上げて、「酔いどれ詩人・海浜リゾート病院研究所 その二・邪馬台国はどこにあったか？」と「酔いどれ詩人・海浜リゾート病院研究所 その一・織田信長はなぜやすやすと本能寺で殺されてしまったか？」ずつと以前には「酔いどれ詩人・海浜別荘病院研究所・日本は何故不利な戦争に突入してしまったか？」など、シリーズとして出版されている。

さて今回は、どうしようと田沼 遼は特別室の病室から見える、鎌倉材木座の青い海を眺め眺めていた。「酔いどれ詩人」などという通称は、実は彼自身が名乗っているのです。田沼は実はかなりきまじめな人で、さるキリスト教系の女子大学で講師の職も担っているのです。講義はもちろん、日本文学である。

軽くドアがノックされた。どうぞという田沼の声で入ってきたのは、文華爛漫社の女子編集社員、田村先生担当の三十台始め独身の山辺沙也香やまのへさやかであった。甘いものが好きで日本酒も好きな彼女は、中背でやや肉がついた体型である。しかしながら和服を着せたら似合うだろうと思わせる、なかなかの目鼻立ちがととのった美人である。「先生、また入院だそうですね。先生、お口寂しいかと思ひまして、ノンアルコールビールダーズ持ってきましたよ」

「おいおい、その先生は辞めてくれよ。しかし、そのノンアルコー  
ルはいいね」

「でしょ？ 気に入っていただけでよかったです。・・・ところで、

センス、今回はテーマは、決めておられます？」

「あのね、僕は何も、作品を書くために入院するのではないの。あくまでも僕の暇つぶしの結果を、君が録音から起こしてくれただけだからね。今回もそうとはいきませんよ」

「まあ！センス意地悪じゃないですか」

「あは、そうかな。実は海浜リゾート病院シリーズはなかなか好評で、良い飲み代になっているんで、なにかないかなと考えてはいるんだ、なにか良いテーマはない？」

「そうですね、前作の邪馬台国はどこにあつたかは、詩人らしい万葉集の知識もあつてユニークで、かなり評価が高かつたですね。・出版の立場から見ると、邪馬台国論争はどうやら一段落したように思えますので、古代でも何か違うテーマがないですか」

ドアがノックされ、看護婦長の草野英子がコーヒーを二つトレイに載せて入ってきた。

「山辺さん、お久しぶりです。二年前田沼先生が入院されていた時いらいですね。先生しばらくの入院になりそうなので、又なにかとよろしくお願いいたします。なんだか、先生が体調を崩されたのが嬉しいみたいで恐縮ですが、先生はこの病院の事をエッセイで別荘と呼んでおられますから、病院全体が華やいだ気持になつているんですよ。・あ、コーヒーを入れました、お好きでしたよね。・先生はコーヒーと日本酒とウイスキーにはうるさい人なんですけど、今はいくらなんでもお酒は当分だめなんで、特別に良い豆が手に入りましたので飲んでいただこうと、入れてきました」

## 詩人、テーマを決める

「あ、これはうまいね」一口すすって、ベッドに腰掛けている田沼は立っている婦長を見上げて言った。

「私ね、これと言った取り柄はないんですけど、コーヒーだけはこっているんですよ。気にいっていただいてうれしいです」

「お世辞じゃないよ。ホントにうまい。なにか秘訣があるのかな」  
「良い水を使いますの。私、丹沢の山に近い厚木に住んでいるので、山からのわき水が手に入るんです。その水で普通にドリップで入れますと、安い豆でも見違えるようなコーヒーが作れるんです。でも、今日は豆も一番高いの使ってみました」

「イスラム教では酒を飲んではいけないんだよ。それでアラブの坊さんは、酒代わりにコーヒー・コーヒーなんだ。僕もしばらくはコーヒーが酒がわりだな」

「コーヒーならいつでもお申し付けください。すぐ用意しますからね。．．．ところで先生は、女子大で日本文学を教えているということですけど、日本書紀とか古事記なども教えておられるのですか」「5年まえからね、その大学教授が古くからの飲み友達でね、やってみないかと声をかけられたんだよ。日本書紀とか古事記は、ちよつと自分には縁遠かつたんだがね、講師就任を機会に少し読み込んだよ」

「あら、そうなんですか。私、歴史が好きで閑だと「平家物語」とか、小説の「平将門」などを読む人なんです。．．．今、ひとつ疑問が私にはあるんです。それで先生に聞いてみようかなと思ったわけなんです。いいかしら?」

「解ることなら答えますよ」

「日本書紀と古事記は似ているでしょ。聞くところによると同じ頃に作られたと言つことらしいのですが、同じようなものが、どうして二種類もあるのか私には解らないんです」

「そうだね。それは気がつかなかったな。それは変だね。不勉強で、その質問には答えられないな、ちよつと調べてみるよ」

横で聞いていた山辺沙也香の、眼が輝いた。そして言った。

「田沼先生、それいいですね。日本書紀と古事記には数々な謎があるんですね。その成立とか内容とか。どうです今度は「日本書紀の秘密」などというのは、いけるかも」

「ふむ、そうだね、日本書紀すら偽書ではないか、という人がいるからね。やってみようか。以前に書いた「邪馬台国はどこにあったか」でも日本書紀の記事を、しばしば検証したが『不思議な本だなどと、思ったことがあるからね。山辺さん、取りあえず古事記と日本書紀の原書と注釈本と現代語訳、それからパソコンを一台用意してくれるかな。あとは君の手伝いとパソコンで必要な本はおいおい手に入れることにしよう』、

## 古事記の序文

古事記、日本書紀が届けられて一週間後、昼過ぎ沙也香は田沼の病室にやって来て言った。

「先生、なにか収穫ありましたか？」

「そうだね、その前に、僕が我流で訳した古事記序文を読んでみてくれるかな」

沙也香は、さしだされた原稿用紙に書かれた古事記序文に眼を通した。

## 古事記 序

臣の安麻呂は申し上げます。大昔、この世の根源が固まり始めても、いまだに定かな兆候を取ることがありませんでした。したがって名もなく動きもありません。だれにもその形を判断できない状態でありましたが、やがて天と地がはじめて分かれたれて、神々の誕生となりました。神の陰陽も天地のように分かれたれて二靈（イザナギの命・イザナミの命）は万物の祖先となりました。両神は陰の世界である幽界と陽の世界である現実との両方の世界を行き来して、太陽の神と月の神が眼を洗うにつけて現れ、海水に浮き沈みして身をあらうごとに多くの神々が現れました。この世の始めは暗くてはつきりしませんでしたが、神々の自らある智恵により国を生み、島を生み、再び神を生み、人を生んだことが解ります。天の岩屋戸に鏡を掛けた時から百の天皇が続き、剣でおろちを切って萬神が誕生したのであります。神々が安川原やすのかわらで合議をなされ、それゆえ天下は穏やかになり、出雲の浜で大国主の神に談判してからは、国はいよいよ平穏となりました。この時をもって二ニギの命が初めて高千穂に下り、神武天皇が秋津島を巡歴なされました。荒々しい神が熊に化けて現れるに及んで天から剣を得、尾のある人々が道に溢れて遮り



ましたが、大カラスが吉野への道を導きました。軍の者は舞い踊りながら敵を打ち合図の歌で賊を討ち取りました。崇神天皇は夢の中のお告げを聞いてオオモノ又シ神を祭られ、それ故に賢明な天皇と呼ばれました。仁徳天皇は民家の煙の立ち上るのを眺めて、心安らかになられましたから、今でも、聖帝と呼ばれております。成務天皇は国や県の境を定められ允恭天皇は遠飛鳥に飛鳥の都を建てて、天下の氏や姓を正されました。このように天皇それぞれの方が行ったことは様々でありましたが、道を正すと言うことにおいて他ならないことでありました。

飛鳥清原に大宮殿を建造なさつて、全国をお治めになりました天武天皇の御世の前頃になりますとやがて天武天皇になれる皇子は天子たる徳を持ちながらも、いわれがあつてお隠れになっていましたが、ついに雷鳴を轟かせる時がやつて参りました。

## 古事記序文 二

けれども、天命がまだ至らないので、蟬の抜け殻のように吉野の山に棲息なさりましたが、やがて時を得て伊勢の国に虎のように進まれ、その軍は瞬く間に山川を越え渡り、軍勢はあたかも鳴りやまぬ雷鳴のごとく雄壮でありました。猛士は煙のよう燃え立ち、赤旗は、兵を引き立て、凶徒は屋根の瓦のように崩れ落ちました。そして短時日のうちに敵軍は壊滅し、戦場の悪臭も妖気も、自然と消え澄み渡りました。それで戦役に用いた牛を放ち、馬を休め、心安らかに都に帰り、戦旗を巻き、戈（なぎなたの様な長刀）を納め、天下泰平の歌を歌い都に入られました。時は正に太歳星（木星）が酉の方角にある年の二月、清原の大宮殿にて即位なされました。その道は中国賢帝五帝の一人黄帝にまさり、徳は周王を越えておりました。天皇はしるしとして三種の神器を受けて、その威光は国の隅々まで行き渡りました。しかも天皇は海のように深い智慧をもって、遙かな古代の事を探り求められ、明晰な御心は先代の天皇の業績を見据えておられます。

ここに天皇が言われました。

「朕が聞くことには、『諸家が先祖から伝え持っている帝紀（天皇の系図）と本辞（出来事）は、すでに真実と違って多くの虚偽を加えている』ということである。それであるから、今の時を以て、その誤りを正さなければ、何年も経ぬうちに、その真実が失われるであろう。史実の真実を定めることは、国家行政の根本である。それ故、国史を定め、後の世に伝えようと思う」

時に、一人の舎人（官吏）がいた。姓は稗田、名は阿禮、年は二十八である。人格は聡明で、書を読めば暗唱し、耳にはいる言葉は、記憶した。それであるから、阿禮に勅語して（命じて）天皇の系譜、出来事の数々を読み習わせた。しかしながら、諸々の事情が変遷し、いまだに史書をなすに至りませんでした。

臣がつつしんで思う事には、当代の元明<sup>げんめい</sup>天皇は天地人の三つの徳に通じておられ、その威光は宇宙の隅々まで行き渡り、御殿におられたままで、その徳は馬のひずめの先、舟の舳先まで及んでおります。太陽は天に燦々と輝き、慶雲は空を彩り、二本の幹が一本に合体し、一つの茎から多数の穂がでるといふ、吉兆が次々に現れて、これを書き留める書記官の手を休める閑すらもないありさまでございます。又、異国からの貢ぎ物はうず高くたまり、倉の中が空になると言ふ月は一月もありません。

### 古事記序文 三

ここに、天皇は旧辞の誤っているのを惜しみ、和銅四年（註・西暦711年）九月十八日をもちて、臣安万侶に詔して、先の天皇が命じて稗田阿禮に音読させた旧辞を選録して献上せよとのことでありますから臣はお言葉のままに子細に採録いたしました。しかしながら上古の時は言葉は質朴でありまして文章化することはきわめて困難でありました。漢字の意を持ちて表記すれば、阿禮の表現するところと異なり、かといって、阿禮の発する音のみを連ねては、はなはだ意が通りません。

それでありますから、一句の中に、音と訓をまじえて用い、単語などはまったく漢字の訓を用いて表記したものもあります。その上で意味の取れない言葉は、注を用いて明らかにし、意味のとれるものは、ことさらに注をつけませんでした。姓の読み方については、日下という字を玖沙下と読み、帯の字を多羅斯と読みますが、このようなたぐいは、解ることありますから、特に注をつけませんでした。古事記の内容は天地開闢より始め推古天皇の御世にて終わります。それ故、神代から神武天皇までの神々の代を上巻とし、神武天皇より応神天皇までを中巻とし、仁徳天皇より推古天皇までを下巻とし、あわせて三巻を採録して、慎んで献上いたします。臣安万侶、かしこみかしこみ、深々とひたすら頭をさげます。

八日 正五位上勲五等太朝臣安万侶

和銅五年正月二十

「どうかな、必ずしも原文とおりでないが、まあ、いやしくも僕もへボ詩人ながら詩人であるからには、雰囲気は伝えているつもりなんだがな」と、田沼は、沙也香が読み終わったようなので声をかけた。

「これならよく分かりますね。普通は現代語訳でも、よくわかりませんものね」

「古代の書物にしては珍しく、作者があつかましく出てきて、古事記の成立についてこと細かく説明しているね。天皇・皇子をさしおいて、正五位という、やつと宮殿に上がることができるというぐらいのたいして位が上でない者が、このように官制の書物に文を記載する事じたいが異常な事と思われるんだよ。ちなみに日本書紀編纂の責任者は皇子で第一位という高位の舍人親王なんだ。その舍人親王ですら、日本書紀に序文など書いていないのにおかしいのではないだろうか。まあ、日本書紀には序文とか後書きとかは一切ないのだがね。これは今で言えば、大会社の社史に平社員が序章を書いているような違和感を感じるんだがどうだろう」

「そういえば、そうですね」

病室の窓辺に秋の材木座の海が陽をうけて、きらきら輝いているのが見えている。二人は無口になって、その景色に見入った。

「いつ見ても、良い眺めですね」

「どうだ、そこまでちよつと出てみないか」

「あら、いいんですか」

「なに、大丈夫さ。僕の入院は単なる肝臓君の骨休めだからね」

「ま、都合のいい入院です事」

「君ね、詩人を舐めてはいかんよ。普通、詩人は無法者で悪人なんだよ」

その時、ドアがノックされて、入って来たのは海浜病院の院長、大島五郎であった。

「田沼先生ご挨拶おくれました。ちよつと糖尿病の研究会があったもので、三日ばかり留守にしてみました」

「いや、いいですよ。ひどく体調が悪いわけではないんです。これは内緒ですが、ちよつと詩人仲間との酒のつきあいなどが煩わしくてね。それから逃げるために入院を院長にお願いしようと電話したら、おられなかったのです。そしたら婦長さんがね快く受け取れたんですよ」

「あはは、婦長は、裏で女院長などとよばれてるようですからね、私としては従っている方が楽なのですよ。それで良いのです。．．．ところで、今度のテーマはもうおきまりなんですか？」

「ええ、古事記と日本書紀の関係がなんだか非常に怪しいのです。太安万侶がどのように関わっているかもなんだかはつきりしません。これをすつきりとさせたいのですが、どうなりますか。どうせ暇つぶしの座興ですから良いのですが．．．」

「また、これを元に出版なされるんでしょう？本に登場するということで近頃はこの病院の特別室はだいぶ人気が出てまいりました。また、普通の患者さんも面白がっているようなんですよ」

「おや、良い話しを聞いたぞ。今回は病院から宣伝係として給料が  
でそうだな」

「いや、それはかんべんしてください」

院長が自室に引き揚げたあと、田沼と沙也香は浜辺の散歩に出か  
けた。

十月の日没は早い。西に海を見る材木座海岸は鎌倉のはずれで、人  
影が少なかった。夕陽が雲と海を赤く染めている。田沼と沙也香は  
近くの、海辺のレストランに入り込んでコーヒーを注文した。

「たまには、こうして散歩でもして気晴ししないとね、良い発想も  
生まれてこないよ」

「この時間とても良いですね。先生がここが好きなのがわかります  
わ」

「そうだろう。僕は海が好きでね。君も知っているように、先年妻  
を亡くしてから、子供もいない僕の生活は少し殺風景でね。海があ  
って暖かい人たちがいる海浜クリニクは居心地がいいんだよ。・  
・朝に魚が水揚げされる小さな市場などは僕の詩興をかき立ててく  
れて最高なんだ。・・さて個人的なことはこのくらいにして、こ  
れからの進め方を話そうか」

「あら、ちよつと、先生を寂しがらせてしまったようですね。・  
ごめんあさい」

「僕はね、日本書紀と古事記の神話時代はわりとくわしいんだが、  
雄略天皇以降はちよつと苦手なんだな。私が講師をしている西鎌倉  
女子大学の国文科助教授に、まだ若い早川祐司君という人がいるん  
だけどね、先生にしては余り固くない人でね、いい加減な私と馬が  
あうのだ。今日になって、その彼ならば、私の調査のいい相談相手  
になってくれると思いついたのだ」

「それなら、心強いですね」と、沙也香は言った。

## 古事記の不思議 二

レストランのコーヒーは濃厚で純良だった。良く磨かれたガラス戸の外は広めのテラスになっている。テラスの向こうの生け垣はサザンカで濃い緑色の葉の所々に桃色の花がいくつも花を咲かせている。その向こうに、海が見えている。

田沼はコーヒーに砂糖を入れてから、静かにかき回して生クリーム入れた。生クリームはコーヒーカップの中で、小さな渦となった。それを田村はしばらくじっと見つめた後、沙也香に眼を移して言った。

「古事記が作成されたことは、日本書紀にもその後の史書である続日本紀にも書かれていないのだ。ところが、日本書紀が作成されたことは続日本紀にすっかり書かれているんだよ。古事記が作成された事情は、なんと、君がさっき読んだ、古事記の序文によってのみ、知ることができるに過ぎないんだ。もしだよ、この古事記の序文を、古事記からはずしてしまうと、古事記は成立不明の謎の書になってしまうんだ。歴史の教科書には、古事記が成立した年代がしっかりと知り顔にかかっているが、その知識の出所は、みなこの序文であって、他の書物ではないのだ」

「そういうことなんですか？」

「そう」

「なんか不思議ですね」

「古事記の後の史書である同じ官撰の日本書紀に無視されている古事記はどういう書であるかと不思議だ」

「それでいて、古事記序には、くどい位の古事記成立のいわれが書かれているというのは、なんていいいますか調和が取れていない感じですよね」

「そう、山辺さんの言つとおりさ。この変な序によって、古事記は偽書であるという説まであるくらいなんだ。その説を裏打ちするか



のように、江戸時代に入るまで古事記の存在は忘れさられていたと  
いうのだ」

「意外ですね」

「そうだろう」

「そして古事記が献上されたのが712年で、日本書紀が献上され  
たのが720年で、ほぼ同時に二種の歴史書が完成しているのも不  
可解なんだな」

「そうですね」

田沼はポケットから手帳を取り出して言った。「ここに日本書紀  
が献上された記事をかき写してある。ちよつとそれを読んでみよう。  
それはこうだよ。．．．先にこれ、一品舎人親王、天皇の命を受け  
て日本紀の編纂にあたっていたが、このたび完成し、紀三十巻と系  
図一巻を選上した。．．．これは続日本紀の養老四年、つまり72  
0年に書かれている事なんだ」

二人の会話が途絶えた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5099y/>

---

太安万侶《おおのやすまる》古事記を作った人の秘密 酔いどれ詩人、別荘病

2011年11月20日18時37分発行